寄稿

シナロアから¡Hola（オラ）！（こんにちは）

20～60代の27人

メキシコから研修生迎えて

今春、メキシコ・シナロア州から研修生27人が日本の経営と文化を学びに来日した。何事にも大らかなメキシコの人びとが、生田キャンパスなどで繰り広げたほほえましいエピソード満載の日本滞在記をお届けする。筆者は「講師兼ホスト」を務めた伊藤和憲商学部教授。

伊藤　和憲　商学部教授

講義や工場見学を堪能

温泉など　異文化ショック越えて

みなさんは、この春、専修大学にメキシコ人がたくさん来て研修していたのを知っていますか。

卒業式が終わったばかりの3月24日、メキシコのシナロア州政府の肝いりで、日本の文化と経営を学ぶために20代から60代までのメキシコ人27人が日本にやって来ました。2週間の滞在中の悲喜こもごもについて書きますので読んでください。

1990年の春、メキシコからラウルという青年が横浜研修センター（YKC）に品質管理を学びにやって来ました。6カ月の研修中に、我が家に1泊だけホームステイしたのが彼との出会いでした。その後もクリスマスカードのやり取りを続け、ここ数年間はお互いに行き来して交流を深めていました。

2010年12月に、ラウルからシナロア州の人たちが日本で研修したいので手伝ってほしいという話がありました。何度もメール交換して、ホテルの予約の手配、通訳者の依頼、専修大学では教室やセミナーハウスなどすべての準備を終了し来日を待っていました。

ところが、その冬のシナロアは冷害が厳しく、州政府の補助金を冷害対策に充てることになってしまいました。日本での研修には補助金を出せないというのです。急いですべての予約をキャンセルしました。そして3月11日の東日本大震災です。彼らが日本にやって来ていたら、大変な混乱に巻き込まれていたと思います。

26人のはずが…

11年の12月に、ラウルから申し訳なさそうな文面で、日本での研修を再度依頼してきました。準備は一度経験していたので、容易にこなすことができました。後は参加人数の知らせを待つばかりでした。2月15日の締切日には12人とスタッフ3人の15人に決定というメールが来ました。

まだ増えそうだという添え書きもありました。2月末に18人になり、その後22人に増えました。もう変更できないとメールを出したのに、これが最後と26人のリストを送ってきました。（教務のみなさんには、教室の使用と教職員バスの使用を認めていただきありがとうございました。また、バスに乗り合わせた教職員のみなさん、ご迷惑をおかけいたしました）。

研修では、ラウルが日本文化の論文やニュース記事を解説しました。私は、戦略的計画の立案、バランスト・スコアカードと方針管理、ABC／ABM（活動基準原価計算と原価管理）を講義しました。駐日メキシコ大使館の参事官は、メキシコの貿易事情を紹介しました。州政府スタッフは、システムズ・アプローチを講義しました。

ビールお代わり

工場もたくさん見学しました。サントリー武蔵野工場では、午後町田テクノパークを訪問するにもかかわらず、ビールを3杯もお代わりした人もいました！　日産追浜工場を見学。箱根では鈴廣で蒲鉾（かまぼこ）づくりも体験しました。また、専修大学の近くでは藍染め体験をしました。彼らは初めての藍染めに夢中で、出来上がった作品にはしゃいでいました。

箱根セミナーハウスにも学生生活課の協力で行くことができました。ここでメキシコ人たちは大変なカルチャー・ショックを受けることになりました。

家族にさえも裸を見せたことがないのに、みんな一緒に温泉に入ることになったからです。若い人はすぐに入浴しましたが、年齢がいった人たちは夜中にこっそり入る始末です。妻の話では、女風呂は真っ暗なままで入浴していたそうです。

1日目は男風呂で、2日目は女風呂で湯船が空になる事件が発生しました。6時間もかけてためた湯船からお湯がなくなってしまったのです。自分が入ったら栓（せん）を抜くものと抜いてしまったようです。しかしこの温泉経験によって、2泊もすると恥ずかしさは吹き飛んでしまったようでした。

セミナーハウスではほかにもいろいろなことがありました。畳に布団の経験がないので、管理人さんに布団の敷き方とたたみ方を教えてもらいました。

旧街道をみんなで歩いたのも楽しい経験だったようです。また、みんな梅干しが大好きで、毎食完食していました。

困ったことに、ご飯は味がなく食べられないというのです。ご飯に醤油をかけて食べる人、みそ汁に入れて食べる人、まったく手を付けない人のどれかでした。しまいには、自分たちで料理したいと言ってきました。ところがサバの味噌煮は大好評で、みんながおいしいと言い、「あの魚は何？　どうやって作るの」と、女性たちが管理人さんに聞いていました。

最終日に朝はパン、昼はスパゲティが出ると久しぶりの洋食にホッとしていました。毎食食べられずに残す人がいたのに、最後は、「イトウ、全部食べたよ」とみんなが私に空の皿を見せてくれました。

研修の最後は、ディプロマ（修了証）の授与式です。ディプロマには日本語で、「あなたは2週間にわたり、日本で日本文化を学び、また日本企業を4社訪問しました。専修大学では経営を学習したことを認め、ここに修了証を授与いたします」と書きました。私のサインを捺印（なついん）しました。ディプロマを渡すたび一人ひとりと固い握手を交わし、嬉しくも別れ難いひと時でした。

さらに数日滞在するラウルを残し、みんなは旅立っていきました。ラウルと我々3人にとって、疲労困憊（こんぱい）の2週間でした。シナロア・プロジェクトの楽しかった余韻（よいん）に浸って数日過ごしたラウルもメキシコに帰って行きました。

今回の研修でラウルが計画したことは、メキシコの良さの再確認と日本文化の良いところの吸収です。いわゆる心と頭の「カイゼン」を狙った研修であると後で聞きました。

習慣はすぐに変わるわけではないので、このような研修を何度か体験させて、今日より明日、明日より明後日良くなろうというプロジェクトの第1弾が今回の来日の目的でした。少しずつ参加者は減っても、参加してくれる人がいる限りずっと続けたいようで、「これからもぜひ手伝ってほしい」というお願いも忘れないラウルでした。

▲　修了証を手に喜ぶ研修生のオスカル・アレヤーノさん。右は伊藤和憲教授

▲　修了式で研修生のみなさん＝4月6日、生田キャンパスで（上の写真も）

▲　蒲鉾づくりを体験するホセ・ディエゴさん（右）と伊藤教授夫人はるみさん

▲　日本のサクラを満喫。左端がラウルさん＝三渓園で

（いとうかずのり）博士（経営学）。専門は管理会計。商学研究科大学院委員、会計学研究所事務局長、日本管理会計学会副会長、日本原価計算研究学会理事、社会活動としては病院や企業へバランスト・スコアカードの導入を支援している。